

YCU 夏季短期語学研修 派遣学生報告書

氏 名	S.M.	学部・学科	医学部医学科
学 年	1 年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティ大学		
プログラム名	夏季短期語学研修		
期 間	2024 年 8 月 11 日～2024 年 9 月 8 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

事前にオンラインで行ったテスト（文法・語彙・読解が中心）の結果により Advanced クラスに配属になった。クラスは下から順に Pre-Intermediate、Intermediate、Upper Intermediate、Advanced の四つのレベルがあり、Advanced は CEFR スケールで C1 相当となる。教科書として Oxford の ENGLISH FILE というシリーズの教科書を使用した。一週間で 2 セクション（例:1A と 1B）進めて、金曜日に学んだ内容のウィークリーテストを行うスケジュールであった。

授業は先生によってスタイルが違うそうだが、私のクラスの先生は実用的な部分を重視しており、板書は少なく、話す機会が多く与えられた。テキストの進め方としては、テキストの設問を各自で解き、隣に座っているクラスメイトと互いの答えを確認し、最後にクラス全体で答えを確認する、という流れであった。その中で言葉の意味や発音、使い方などについて質問があれば随時答えていた。合間合間にあるトピックについて隣近所で話す時間が設けられたり、週に一回ほどライティングの課題があったり、テキスト以外にも英語を使う機会が与えられた。印象に残っているのは、各自好きな映画のシーンを選んできて、それについてペアに説明し、自分のペアが説明してくれた内容を伝聞形式でノートに書き、そのノートを別のペアの人と交換し、順番に読み上げていく、という授業だ。前提知識が無い人に映画のシーンを口頭で説明する力、聞いた知識を書き起こす力、他人の手書きの文字を読む力など、さまざまな能力を鍛えられた。私のクラスメイトはほとんどがスペイン人であり、彼らは母語でも日常的にアルファベットを使う関係で、英語を書くスピードが早く、適度に崩した字を書くため、日本人が書く丁寧な英語に慣れている私は読み取りに苦労した。

課題に関しては、毎日 30 分程度で終わる課題が与えられた。多くの場合はテキストの後半にある Grammar Bank や Vocabulary Bank を 1 ページ解いてくる、といった課題であった。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

まず、テキストは各セクションに何らかのテーマがあり、例えば 1A はパーソナリティがテーマだった。そのため、あるテーマに関連した語彙を集中的に学ぶことができた。単純に語彙が増えるだけでなく、その単語が持つイメージや、よく似た意味を持つ単語との相違点なども学ぶことができた。また、ことわざなどに関しては、これはテキストに載っているがネイティブは使わない、など実践的な知識を得られた。

私のクラスの先生は、新たな単語や使い馴染みのない単語の使い方に関して、とにかく現実的な例文を作ってみることを強く推奨していた。そして、質問をしたり、自分の体験を話したりする際に、コロケーションの問題などでネイティブには通じない言い回しがあれば逐一指摘してくれた。そのため、新しく単語やフレーズを知ったとき、その後使う際に間違った使い方をしにくかったり、選択肢として上がりやすかったりと、授業が自分の身になっている実感があった。

授業の最中や休憩時間に、文化に関して気になったことを質問する機会もあり、文化の違いについても知ることができた。テキストのテーマと絡めて先生側から自国の文化について質問されることもあり、違う文化圏の人に自分の文化について説明する能力を高めることができた。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

授業を受ける前は、文法や発音など、理論的な部分を完璧にすることに必要以上に固執していたと思う。私のクラスの先生は、発音に関しては基本的に指摘せず、ネイティブが聞き取れないような発音・イントネーション・アクセントであった場合のみそれを指摘し、直させるといった方針であった。逆に言えば、伝わっているうちは発音や文法などにこだわりすぎる必要はないのだ、といい意味で力が抜けたと思う。一ヶ月そのような環境にいたことで、語学を学問として学ばないのであれば、大切なのはコミュニケーションである、という意識がしっかりと定着した。

私は発音などに関しては特に問題を抱えていなかったため、クラスメイトへの指摘から気づきを得ることが多かった。例えば、クラスメイトの多くを占めていたスペイン人に対しては、早く話しすぎて単語間の子音が欠落している、破裂音が弱くて聞き取れない、などの指摘をよくしていた。そういった癖のようなものは母語に引っ張られてしまい、また同じ母語話者同士で英語を勉強していると気が付かない部分でもあるので、ネイティブに指導してもらわなければ直らないのだ、というのは新たな気づきだった。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

日本でただ英語の授業を受けているだけでは、話す話題が似たようなものになってしまうし、そもそも話す機会が足りず、やはり英語力を伸ばす上では不十分であると感じた。定期的にネイティブの先生と話す機会を設ける努力が必要だと思う。また、そういった機会には、発音やコロケーションによって伝わらない部分があれば指摘して欲しいこと、さまざまなトピックについて話したいこと、などを要望として伝えればより英語力が伸びると思う。さらに、とにかく英語の文章を読むことが英語力、特に高度なライティングやスピーキングを伸ばすことに繋がると先生に指摘された。その際、一度に量を読むことよりも、量は少な

くてもいいから毎日読む習慣をつけることが大切だと教わったため、今後は英語の文章を読む習慣をつけたいと思う。

YCU 夏季短期語学研修 派遣学生報告書

氏 名	S.S.	学部・学科	国際教養学部国際教養学科
学 年	1 年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティ大学		
プログラム名	ダブリンシティ大学 夏季短期語学研修		
期 間	2024 年 8 月 11 日～ 2024 年 9 月 8 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

3 週目までは、スペイン人 7 人に日本人が 8 人でした。

スペイン人のプログラムが 3 週目で終わりだったのと、担任の先生が異動になったため、最後の 1 週間は他のクラスに転入し、そこは日本人だけの 15 人くらいのクラスでした。元からそのクラスにいた人に聞くと、前の週まではスペイン人が 1 人だけいたそうです。そのため、クラスによって国籍の割合はかなり違うように思えます。

このスペイン人の方たちは、スペインで高校の先生をしていて、夏休みの期間を使って英語の勉強をしに来たと話していました。

授業は先生によって違っていて、最初の先生は基本教科書を中心に進められました。内容は基礎的な文法の勉強でした。問題は四技能すべてあって、ペアと答えを確認したりお互いの意見を交換したり、必ずペアワークがありました。また、スペインの方たちは国民性からとてもお喋りで、授業中もわからないところがあればすぐに先生に質問するという姿勢でいたので、彼らへの回答を中心に授業が回っていた部分もありました。週に 1 回はライティングの時間があり、書き終わったらすぐに先生が文法ミスなどを確認してくれました。特に印象に残っているのは、先生がバズーキーというアイルランドの楽器を弾きながら民謡を歌ってくれたことです。曲を聴いた後に、歌詞に使われているケルト語由来の単語の意味をペアで予想しました。類語を考える練習になったと思います。

二人目の先生は、IELTS 対策に力を入れているようで、ライティングで点を取るコツを教えてくださいました。授業は先生が用意したトピックを中心に進められました。難しい単語を使うときはネットでその例となるような画像や動画を見せてくれて、内容が理解しやすかったです。

二人の先生で教え方は異なっていましたが、授業中に自発的に発言すると喜んで応えてくれるというのは共通していました。自分自身も発言した方が記憶に残りやすく、授業に参加するのも楽しかったです。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

中高で習った文法を英語でもう一度学びなおしたのですが、日本の学校では使い分けを曖昧に教えられた点を、ネイティブのリアルな感覚で教えてもらうことができました。特に時制についての理解が深まりました。授業でも、時制は丁寧に教わり、自分からも質問をしました。また、授業中にアイルランドの歴史や神話を先生が扱ってくれたので、事前にインターネットで調べたこと以外のことも知ることができました。特に神話が印象的でした。週末に観光地の土産物店に行った際に蛇の柄のしおりを見つけたのですが、ちょうどその次の週にケルト神話の蛇と聖パトリックの話をしていたので、アイルランド文化への興味が高まりました。普通に生活してはこのような知識は得られなかったと思います。自分で自覚しているような関心のあること以外からも、思いもよらない知識が得られると気づくきっかけになりました。クラスメイトのスペインの方たちと毎日コミュニケーションをとる中で、スペイン人の日常の生活スタイルを知れたうえ、外国の方と話すときに意識すべきことがわかりました。母語が英語の人であれば、単語さえ合っていれば伝わる人が多いですが、第二言語として学んでいる人に対しては、いかに類語がわかっているかが重要だと知りました。初めは伝わらなくても、言い換えれば理解してもらえたことが多かったです。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

このプログラムに参加してよかったと思える一番の理由は、日本人以外と英語で英語の勉強をできたことです。システムとしては横市の APE と同じですが、そこに外国人がいることで多くの刺激がもらえたと感じます。スペイン人の国民性もあると思いますが、彼らは授業中に活発に発言、質問をしており APE の授業の目指す姿がわかりました。日本人の英語がなかなか上達しない理由もわかった一方で、日本人には日本人のやり方があるのかもしれないとも考えられました。

学校の授業などでは、ネイティブの方と会話に挑戦する機会は多くありますが、自分と同じく英語を学んでいる人と話すのはとても新鮮でした。相手も英語学習者であるためプレッシャーはかからないうえ、もはや英語しか会話する手段がないため、どうにかしてお互い意思疎通をしようと頑張った瞬間に、世界共通語としての英語を話す意義を感じられました。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

授業中にただ聞くだけではなく、自分でも深く考えてわからないところは積極的に質問する姿勢は今後も続けていきたいです。日本での自分はとても消極的であったと、海外に出たことで自分を客観的に見つめることができました。今の自分は正しく進めているかどうかを確かめながら、自ら学ぶ姿勢を大切にしていきたいです。現地の先生が IELTS の話をしていたことから、英語の試験のスコアは英語を学習する上で重要なのだと改めてわかりました。海外で英語を学んだということを証明するためにも IELTS や TOIFL で高いスコアを取るのを目標に勉強を始めようと思います。

YCU 夏季短期語学研修 派遣学生報告書

氏 名	M.O.	学部・学科	国際教養学部
学 年	1 年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティ大学		
プログラム名	夏季短期語学研修		
期 間	2024 年 8 月 11 日～ 2024 年 9 月 7 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

4 週間の通学の間に担当の先生が 3 度変わり、先生によって授業の進め方は異なっていたが、大学からレベル別に配布されたテキストを使って主に授業がすすめられた。リスニング、リーディング、文法などを学習することが多かったが、文法の難易度は中学生レベルで比較的易しかった。しかし、すでに知っている文法事項を英語で説明するとどうなるのかということが知れたため面白かった。ペアやグループでテキストの問題を進めることが多く、英語を使って説明することの難しさを実感するとともに写真やジェスチャー、知っている単語を駆使してあきらめずに説明すれば高確率で伝わるということも実感した。クラスにはスペイン人と日本人が同数程度おり、ペアワークやグループワークを行う際、先生が日本人とスペイン人がペアになるように組んでくださったため、うまく伝えられない時も日本語が使えないという状況が、英語の説明力の向上につながったと思い、よかった。実際、登校初日から登校最後の日の自身のスピーキング能力を振り返ってみても向上したと言い切れる。一緒に授業を受けていたスペイン人はネイティブスピーカーではないが、自身が英語を使うことでスピーキングが向上したことから、英語をアウトプットすることが大事だとわかった。また、一番印象に残った授業はアイルランドの民謡をみんなで歌った授業だ。先生が歌詞の意味を一から説明してくださり、意味を理解したうえでみんなで歌うことができたのがとてもいい思い出になった。また、アイルランドはアイルランドの民謡の生演奏が聞けるパブが有名だと聞いたため、帰国前に文化体験をしにパブに行ったのだが、そこで授業で歌った曲を聴くことができるととてもいい経験になった。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

スポーツの単元を扱った際には、各スポーツの運動場の表現仕方など知らなかった単語を習得することができた。その際、ダブリン市内にある競技場も紹介してくださり、そこで伝統的に行われていることや、アイルランド発祥のスポーツについてもビデオを見ながらアイルランド文化を学んだ。また、交通に関する単元も印象的だ。ここでも長距離バスなど新しい単語を習得できたと同時に、ダブリンでは電車が街を走っておらず、バスが交通機関の中心的存在であることなど、ダブリンと横浜の交通の違いがはっきり見受けられたのも興味深かった。ほかにも、英語学習におすすめの無料サイトやアプリを紹介してくださった先生がおり、IELT のテストにも使われている英字新聞を無料でサファリで見られるという情報は参考になったので私も活用したいと思った。また、授業内容とは関係ないがスペイン人の英語は y をジュと発音している人が多いなど日本で勉強していたネイティブの発音とは少し異なっていて、聞き取りにくかったが、世界で話されている英語はネイティブの英語の方が少数であると思うため、英語学入門で学んだ ELF (共通語としての英語) でコミュニケーションをとっていけるスキルも身に着けたいと思った。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように (気持ちなどが) 変化したか。(400 字程度)

授業を受ける前は内容を理解できるか、うまくアクティビティをできるかなど、不安に思うこともあったが、授業が実際始まってみると、先生や一緒に授業を受けていたスペイン人の反応が温かく、日本ではがちがちに緊張するみんなの前での発表も楽しんですることができ、楽しく授業に取り組むことができた。また、スペイン人の積極的に発言や質問をする空気に影響を受けて、私もわからないことがあったときには先生に質問するなど、違った雰囲気の中で授業を受けることによって日本では普段あまりやらないこともできたのがよかった。また、授業ないでうまく言語化できなかったことや、先生の言っていることをよく理解できなかった時もあり、悔しいと感じたためさらに英語の学習を頑張っ、英語のスピーキング力や理解力を上げたいと思うことができ、授業前と後で英語学習に対するモチベーションが上がった。

(4) 今後はどう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

今回の留学でアウトプットをすればするほどスピーキングは伸びる感じた。日本での英語学習は自分でするときも学校でするときもリスニングやリーディングなどが取り組みやすいためメインになってしまうが、せっかく一度向上させたスピーキング力を落とさないためにも英語を話す機会というのを定期的に作ろうと思った。具体的には横市の授業で APE を受ける、英語を話せる横市の取り組みを活用する、英語を話せるネット上のサービスを活用するなどだ。そして、4 年間の間にまた留学に挑戦したいと思っているため、IELT のスコア獲得のためにもリスニングやリーディングの英語の学習も続けていきたい。